

墓碑銘の実力者

空条序章

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2004年。イタリアのネアポリス。

「おお、私の可愛いドツピオ。」この声を追い求める青年がいた。

彼の知っているパツシヨーネはもう存在しない。ボスは消息不明。親衛隊や麻薬組織も全滅。現在のボス、ジオルノ・ジョバーナ。現パツシヨーネと繰り広げる新たなスタンド使い達との出会い。青年はボスに出会えるのだろうか。

目次

Episode. 1	目覚めの着信（アラーム）	1
Episode. 2	聞いた事のある組織（パツシヨーネ）と新たな	
る幽波紋（エネミー）	———	5

Episode. 1 目覚めの着信（アラーム）

確かに

そこにいるのなら・・・ボス、完全にぼくたちの勝ちだ！

でも・・・さびしいよオオオ・・・ボス

いつものように

電話ください・・・

待ってます・・・

「とうるるるるん」

どこか聞き覚えのある着信音。一時は安心したり、うんざりする事もあった・・・。

しかし明らかにここはコロッセオじゃない。自分がどの状態かわからない。目も開く様子。着信音は出しているが、電話の場所が分からない。目を開けて探し出す。しかし持っていた物はカエル、たばこ、人形など全然違う物。

実際の事を話すと、これはボスの電話ではない。彼自身が勝手に発している音だ。

「う・・・頭痛がする。ここはどこだ・・・？」

「とうるるるるん」

「ハッ!？」

（一体なんなんだ、この着信は!?まるで学生が朝起きる時に苦戦する目覚まし時計だ。）

「とうるるるるん」

「やかましいッ!!ビイビイほざいてるならそっちから来やがれッ!!!」

こんな異色な行動を見せられれば、当然警察を呼ばれるはずだ。しかしここには誰もいない。幸い、と言って良いのか?それかここは地獄なのか。そんなこと考える暇はない。

「まさか・・・!」ポキッ

「もしもし、ドッピオです。」

青年は、何を考えたのか。昏睡で頭がどうかしたのか。小枝を耳にかざした。

「音信不通…？ばかな!?ボスは肝心な時にしか電話せず、反応もしない！」

その後あれこれ物を試した。

「ここは死後の世界…？」…すると人の声が。

??? 「君、迷子か？」

10代後半くらいの人だ。

「え、ああ…うん。」何かを隠す素振りでも話した。実際に何かを隠していたらバレバレのはず。

それに良い歳こいた奴が迷子と答えるなんて恥ずかしい。

??? 「良かったら、一緒にレストランにでも行かないか？」

どうやら怪しい目ではない。

「あ、はい…是非。」何も食べていない彼は答える。

??? 「そうか、それじゃあ行こうか？」

奇行は見られていないのか、それとも見ているが隠しているだけなのか。そんな事考える理由がない。

「わかったよ。」どこか安心した様子。

（数分後）

??? 「ほら、あそこだ。」青年が指差す。

随分立派な店だ。しかし急に目覚めた彼には1リラもない。そう考えていると、青年は店へ入る。

慌てて彼も小走りでも着いていく。どうやら青年が良く通うらしい。

??? 「何を頼むかい？」

青年はニコツと問い掛ける。まるでお子様ランチを頼む息子を見る父のような目で。

「それじゃあ、スパゲティで。」適当に頼んでみた。すると青年も

??? 「じゃあ、僕もそれで。」

少し適当に選んでいるように見えたが、そんな感じがしない。

青年はベルを鳴らす。その時だ。

ピンポーン…

{とうるるるるん}

??? 「ん?何か...。」

ベルの音と同時に鳴ったので、気付いていない。

「ゲホンッゲホン」わざと咳き込む。しかし背筋は凍っている。

「ご、ごめん。少し気分が悪いから外に出るよ。」

??? 「分かった。」

路地裏へ。

「一体なんなんだよ...。僕をからかっているのか?頭痛も強くなつて来る...!」喚きながら倒れ込むしかなかった。

隣にあったパイプを折る。

「ボス、あなたの言いたい事を察しました。親衛隊は全滅、あなたも音信不通。僕があなたを引き継いで見せます。ボス。いや、支配者...!」

??? 「どうかしたのかい?」

青年は何かを考えていた様子だった。テーブルにはもうスパゲティが。

「いいえ、なんでも...。あ、いただきます。」フォークを手にし、巻いて口に入れる。

??? 「そういえば、名前を聞いていなかったね。そっちから名乗って貰えるかい?」

再度背筋が凍る。思わず噛み終えていないパスタを飲む。

「ぼくの名はドッピオ」自分から名乗ったのはいつぶりか。少し新鮮な感じもして、恐怖もある。

??? 「ドッピオ、か。申し訳ないけど、呼び捨てでいいかな?」

特に怪しんでもいない。

「はい。あ、あなたの名前も教えて下さい。」心臓の鼓動が聞こえるが、勇気を出して問い掛ける。

??? 「僕かい?僕の名は、

パンナコッタ・フーゴ。

n
u
e
d
↓

T
o
B
e
C
o
n
t
i

Episode. 2 聞いた事のある組織（パツシヨーネ）と新たな幽波紋（エネミー）

「フーゴ、さん？」相手は此方より歳上。呼び捨ては不味いと思う。

フーゴ「フーゴでいいよ。僕も呼び捨てなんだからさ。」

微笑みながら言っている。ずっとこの空間に居座りたい。

「よろしく、フーゴ。」やはり歳上を呼び捨てにするのは彼に慣れない。

このままずっとお話を続けた。もしかして、ボスと電話していた時以上に話していたんじゃないか？と思うな。

すると耳を傾けなくなるような話題が出てきた。

フーゴ「最近、イタリアの治安は良くなってないかい？」

「え？」治安が良くなっている事は信じられない。確かにボスが麻薬組織を広げていたはずなのだから。

「そうなんですか？」ギャングにとって、治安が良くなるのはあまり信じ切れない。

フーゴ「僕も言っちゃうと、ギャングなんだ。」

まさか。エイプリルフルのようなノリなのか？

「じよ、冗談ですよ？組織の名前だって、秘密なんじゃ…。」心臓の鼓動が聞こえる。

フーゴ「少し耳を貸してくれ。」

そう言われ、耳を傾ける。

フーゴ「君なら、秘密を隠すと信じられるんだ。」

「は、はい…。」

フーゴ「パツシヨーネ。これが僕の組織の名前だ。」

彼はそう囁いた。

(え? 待て、理解が追いつかないぞ? 夢、もしくは死後?)

苦笑いをしながらスパゲティを食べた。確かに美味しかったが、そう思う暇もない。

「す、すみません。もうそろそろ帰ります。家の事情が……。」こんなことを言われて怪しまない奴はいるのか? 内心そう思った。

フーゴ「わかった。また一緒に話そう。ここだね。」

とてつもない安心感を抱かせる笑顔。人は見掛けによらないんだな、と感じた。

↳数分後↳

??? 「フーゴ、そんなところで何をしてるんだ?」

フーゴ「ああ、迷子らしい人と話していたんだ。今ちようど家に帰っちゃってね。」

??? 「なるほどな。それにこのお店。誰かに似てないか?」

フーゴ「バレちゃったか……。まああなたなら何回も来ているし、簡単に察せちゃいますからね。」

??? 「こいつ、もしかして仲間に率いれようとしてんじやあねえか? まるでどっかの幹部みたいだな。」

フーゴ「流石にそこまではやらないさ。ふふ……。また会ったら詳しい話でも聞こうかな。」

店を出た瞬間、時でも飛ばしたかのように、急に人通りの少ない拓けた場所へと逃げ込む。

「はあ……。はあ……。僕は一体、何者で誰なんだ!?!今の組織はどうなっているんですか!?!」

困惑が続くが、彼は一つ新たな決意を持っているのだ。

「しかしボス、必ずあなたのような支配者になってみせます！」

足音を感じる。人が来たはずだが、フーゴさんとは違い優しさを感じない。

??? 「なあ、君。」

タキシードをした茶髪のツーブロックの男が近付く。どうやら20代くらい。

「誰だ…?」ドキドキと混乱し、あやふやになる。

??? 「少し写真を取らせてもらおうよ?」

次の瞬間、人型のような何かが見えた。

パシヤ!!

「うう?!」あまりの眩しさに、目を手で覆う。

??? 「これは驚きだな。俺のサーチャーが見えるなんてよ。」

サーチャー?なんだそれは。そんな事を考えていると、男が此方の周りを歩き出す。

??? 「俺の能力が見える奴っていうのは、特殊な奴らしいんだ。」

相手の後ろから霊のようなヴィジョンが。

「これは確かに、ボスの言っていたスタンド…！自分の身を守る為に使う物！」彼もボスからスタンドを借り、戦った事があるのである程度は知っている。そして此方も相手と同じように歩く。

??? 「へえ、見えるだけじゃあなく、スタンドも知っているんだな。」

「お前は、何しに来たんだ?」そう問いかける瞬間、ある失態に気付く。

??? 「スタンドを知っていてもそれ以外ではただの人間のようなだ…！」

そう、射程距離に入ってしまったのだ。

「ぐああ!」もれなくスタンド攻撃を受ける。

??? 「アホが。スタンドを知ってて距離にも気付かねえなんて、とんだ計算違いだったな。ヴィネガー・ドツピオ。」

攻撃を受けた瞬間、相手は勢いに乗り追撃を仕掛ける。

(このままじゃやられる!だけど、ボスは音信不通だ!ここは此方の身を守る為に、出すしかない!)

「黙ってりゃいい気になってんじやあねえぞッ！チンピラ！」

相手の攻撃を予測し、避ける。

???「やはりスタンド使いか、お前。先に名乗っておこう。俺はロノンド・グルーヴだ。そしてこいつはスタンドのサーチャー。」

サーチャー（検索） 【破壊力：B スピード：A 射程距離：C

持続力：D 精密動作性：C 成長性：C】近距離パワー型。メカニツクな頭と手足に胴体の表がレンズになっているスタンド。時間を掛けながらレンズから光を出して写真を撮り、そこから個人情報、現在地を知る事ができる。この光はスタンド使いでしか視認できない。

「これは… エピタフ！ボスに貸して貰っていたスタンド。だけでもう貸し借りじゃあない。僕が操っているんだ！」

此方のスタンドであるキング・クリムゾンは、パワーとスピードならば相手を越すが、射程距離が2mと少ない。

ロノンド「再起不能にしてやるぞ！ドツピオ！」
ラッシュを仕掛けてくる。

「未来が見える…。このラッシュも！避ける！」キングクリムゾンの腕を出して応戦。パワーではこちらが上。

「うおおお!!喰らええ!!」相手の腹部をスタンドで殴る。

ロノンド「がはあ!」パワーAの攻撃を受けて吐血し怯む。

「そこだ！」相手が怯むと同時にラッシュを叩き込む。

ロノンド「うぐう!?!この力…！」

そのまま殴り飛ばされる。

「俺の名前を知っている奴をここに逃がしてはいけない！」この言葉は自分の為、ボスの為なのだ。

ロノンド「少し油断した…。しかし俺にここまで打ちのめしてくる奴がいるのか。それじゃあ全力で殺る！」

パシャ！

エピタフでは光を免れない。

「ぎゃっ!?!」目を覆うも、周りを殴りながら後退る。

ロノンド「それで俺を視認したつもりか？マヌケ！」

サーチャーの拳が数発命中する。

「ぐう！奴を視認できないのなら…！」

ロノンド「もうお手上げか!？」

もう一度光を当ててくる。

「ここだあー」目を覆いながら、スタンドの腕で周りに円を作る。この地面はコンクリートではなく石、砕いて砂利だ。

ロノンド「何!？」

「砂ぼこりを当てさえすれば、奴も僕を見失いおあいこだ！そして相手の目が眩む事によりスタンドの光は無くなる！先に目を開けるのは僕だ！」その時だ。彼は片鱗を見せる。

「帝王を脅かす者は、決して許されない…。それがどんな権力を持つとうと！」右、左、右、右、左と殴り、スタンドでラッシュを繰り返す。彼は加減をしている。キングクリムゾンのパワー：Aならば、腕で相手の体を貫通する事ができる。その答えはただ一つ！彼がスタンドに耐えきれないからだ！こういった前例はよくある。スタンドが発現すると、闘争心の少ない者はスタンドを制御出来ず、実質スタンドに殺害されてしまうからだ。しかしそんなにそんな事を知らないドツピオはヒートアップして行く。

ロノンド「こいつ、スタンドで戦い慣れて…。ぐおおああ!!！」

仰向けに倒れ込んだが、皮肉にもまだピンピンしている。

「これは…。違う！支配者は、ただ力でねじ伏せる者じゃあない。支配者は！恐れを捨て勇気を知った者！そんな支配者に、僕はなりたくない！」

ロノンド「こ、こいつには悪を感じる…。しかし一つ！負けないくらしいの気持ち…。それは正なんかじゃあない、勇気…。！スタンドのパワーも別格だ…。このまま戦い続けても民間人を巻き込む騒動になり、組織に支障が出る…。おい、ドツピオ。」

「お前、今組織って言ったのか？」身構えている。

ロノンド「これは俺の負けとする。一時的な降参だ。お前の勇気には俺も手出し出来ない。急に襲いかかってすまなかった。自分勝手だが聞いてくれ。お前の能力が気になるんだ。これから俺のアジト

へ向かう。」

「さっきまでは怪しく絡んで来たクセに、僕を利用しようとしているのか?」

ロノンド「その件は反省するさ。だが、今からアジトの仲間へ電話する。待っている。」

(この場面……。ボスなら不意打ちで殺害しているのか……。?だ、ただ僕は。ボスとは違う道を歩いてみたい!)

く一方アジトではく

「おい、電話が入ったぜ?またロノンドの奴からだ。」

「あいつの事だからさあ、きつとそこら辺のチンピラ取っ捕まえてんじやあないの?」

「まあまあ、その取っ捕まえた方が此方に来ても仲良くするんですよ?」

「へっ、スタンドを発現したばつかの奴は一般人相手に調子こいてるだけで自分と同格の奴がいればビビって逃げ出すんだぜ?」

「下手な鉄砲数撃ちや当たる。ってか?万が一めっちゃ有能な奴を引き入れればパッションネの幹部も夢じゃあないからな。」

To be Continued↓